

2020. 8. 30. 聖霊降臨節第14主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書12章49-59節

『今の時を見分ける』

「今の時を見分ける」という説教題は今日の聖書箇所の中の主の言葉です。しかし、今の時を見分ける、と言われても、何をどう見分けるのか。すぐにはピンとこない言葉だと思えます。

聖書を読んで、その言葉づかいがよくわからないときや、自分の日常では、そういう言葉づかいをほとんどしないという事があります。その場合、その聖書の前後箇所をじっくり読んでみる、ということはとても重要で、その文脈の中で、言葉が生きて語りかけてくる、ということがしばしばあるのです。

「今の時を見分ける」という言葉も、それを単独で読めば、よくわからない、ということで終わってしまうのですが、もう一度前の部分、すなわちルカによる福音書12章を読んでみると、輪郭がはっきりしてきます。今12章をあえて簡潔に要約すれば、次のようなことが語られていました。

まず、1節～12節。ここでは偽善ということが語られていました。ただし、ここでの偽善は、自分がたいして善い人でもなくせに善い人のように振舞う「偽善」ではなく、ほんとうはキリストを信じて従って歩んできたのに、あたかもキリストを知らない者であるかのように振舞う「偽善」のことでした。

次いで、13節～21節には自分のために富を積むということに終始するのではなく、神の前に豊かになりなさい、ということが語られていました。

22節～34節には思い悩むな、ということが語られていました。しかもそれは、神との関係の中で安心と救いを受けとり、根本は大丈夫だから、安心して日常を思い悩み、ということでした。そして、35節～43節では主人と僕という関係の中で、僕として生きることが語られました。

こう振り返ってみると、ルカ福音書12章はイエス・キリストを信じて生きる者のどう生きるべきか、が語られています。しかもそれはただ並列的にAもBもあるよ、と語られているのではなく、段階を踏んでいくように、次第にキリスト者の生き方が鮮明になっていく、そのように語られています。キリス

トを信ずる者の「どう生きるべきか」は、わたしたちが自分で考え、自分で判断するものではありません。自分の中から生まれる価値観や、経験上養われてきた常識でもないのです。神が望まれることを、神からの言葉によって示され神との関係の中でそれを受け取り、それによって生きるということ、それがキリストを信じる者の生き方なのです。

今日の聖書箇所である49節～59節も、そのような文脈の中にあることを十分踏まえて聞く必要があります。ここでは、これまで12章で語られたキリスト者の歩みを生き始めることでどういうことが起こってくるのか、が語られています。

例えばキリストの僕として生きることで何が起こるのか、それは分裂だ、とキリストは言われるのです。それはよく考えてみれば、わかることです。

キリストの僕として生きるのですから、キリストにお仕えするということが最優先される。そうすれば、その人の中でこれまで最優先にしていたこととの間で分裂、対立が起こるのは必至です。これまで自分というものが最優先されていた人にとってキリストに仕えることは、今までの自分との分離、分裂を引き起こします。自分のために富を積むことが最優先されてきた人にとって、神に仕えること、神の前で富を積むことは、これまでの自分との対立を生み出します。

ただここで、性急に誤解してはならないことがあります。キリストに仕えることは今までの自分の生き方と対立すると聞いて、あれかこれかの二者択一のように捉える必要はないということです。キリストに仕えるのであれば、世俗の仕事はすべて放擲して修道院に入るしかないのか、ということではない。キリストを信じる者になったからと言って、家族も、家庭も顧みず、一心不乱に布教活動に邁進するしかない、というのではない。キリストに仕える、キリストの僕として歩む、ということを受けとめつつ、世俗の日常を生きるのです。それは、妥協しつつ生きる、ということとも違います。人生の根本の方向として、キリストに仕えるということを受けとめながら、今ここでの与えられている日常を自分として生きるのです。当然そこでは葛藤や、悶えが生まれてきます。決められた何の公式もないからです。キリストに仕える思い、祈り、願いを抱きつつ、日常の仕事や家事、人間関係を生きるのですから、当然割り切れない思いや事柄もたくさん出てくるのです。しかしそこで生きるのです。そこにその人のキリスト者としての固有性が生まれていくのです。例えば、日曜日に家族のことでいろいろあり、礼拝に参加できるかどうか、悩むという人も少

なくないでしょう。そういう事柄ひとつとっても、わたしたちは、引き裂かれるような思いを経験することもあるのです。

次に出てくるのは、54 節からで、さまざまな自然の様子を見て、気象のことは見分けるのに、どうして今の時を見分けることをしないのか、ということです。自然の様子を見て、天気の様子を予測する。おそらく天気予報など何もない時代の人たちは、そうしたことがいやがうえにも身に着き、今の小さな変化から、先のことを見通したのでしょう。

ではなぜそのように心の目や、精神を集中させて、神との関係の中で、キリストとの関係の中で、今がどのような時なのか見極めないのか。それは12章全体が語っている内容と重なっていくのです。

おそらくわたしたちは、ルカ福音書12章でキリストが指摘されるように、どこかで偽善者として生きている。キリストを知っている者でありながら、知っていない者のように日常すごしているからです。さらに、わたしたちは自分のために富を積むことは重ねながらも、神に豊かになろうとあまりしてはいないからです。また日常のあれやこれやを思い悩み、思い煩い、それらの煩いに心奪われて、神がわたしたちに必要なものをご存知である、だから思い悩むなど言われていることを、まともに受けとめていない生活していることがあまりにも多いからです。主人に服従する僕としての生活を日常のほとんどの時間でしていないからです。だから、天候を見分けるようには、今の時を見分けようとはしないのです。

ルカ福音書12章を我が事として読むときに、キリストが指摘されていることに胸を張って、わたしは偽善に生きているし、神の前に豊かになろうとしているし、思わずらいなど何一つしないし、キリストの僕として生きている、そう言える人がどれだけいるのでしょうか。

わたしたちはまず、キリストの言葉の前で謙遜になりたいと思います。そして、キリストの言葉に反して生きている自分を正直に見る必要があります。その上で悔い改めの祈りをし、「神よ、わたしは、キリストの言葉に反して生きていることの多い自分ですが、それでもなお、あなたの支えと導きの中で、キリストの望まれるところから従っていきますよう、願っています」と神に求めていくことが大事なのです。

57 節から 59 節の主の言葉は、負債を抱えている者が、相手から訴え

られている状態、ということなのでしょうか。役人のところに行くまでに和解しなさい、さもなければ、あなたは牢に投げ込まれ、最後のお金を返すまで牢を出ることはできない、という話です。これを12章全体の文脈の中で読めば意図するところは明白です。わたしたちが負債を抱えているのは、神に対してなのです。そうであるならば、決定的な裁きの下される前に、神と和解しなさい、ということです。神と和解すると言っても、それはわたしたちが自分の思いつきで謝罪をするということではなく、神が与えてくださった和解、十字架を受け入れ、信じ感謝すること、それが神とわたしたちの和解です。そしてそれ自体が「今の時を見分ける」こととつながっているのです。

ルカ福音書12章はわたしたちの今の生き方、在り方を根底から揺さぶります。問い直してきます。この主の言葉の前を素通りするのか、立ち止まって自分に語りかけられているものとして聞くのか、大事な分岐点だと思います。例えば自分本位（それはたんに我儘という意味ではなく、自分の考えや判断で自分なりに生きるということ）に生きているということで、それなりの座りの良さや、安定があるとして、この12章の言葉に聞き始めれば、文字通り揺さぶられます。割り切れない思いや、分裂や、対立も生まれてきます。

しかし主イエスの言葉は、わたしたちにとってのほんとうは、神の言葉に聞いて、主の僕として生きること、それがほんとうなのだ、と静かに、確かに語りかけてくるのです。もう一度ルカ福音書の12章の言葉をゆっくり、聞くところから、わたしたちの歩みを、始めていきましょう。